

# 昆虫によるアナフィラキシーショック 広報げろ 2017.9

## 昆虫によるアナフィラキシーショック

8月をピークに9月はハチに刺される事故の多い季節です。最近ではアリも問題になっているので、今回は死亡にもつながる昆虫によるアナフィラキシーショックについて考えます。

わが国ではアナフィラキシーショックによる死亡事故で最も多い原因は医薬品、続いてハチ刺傷です。また動物が原因の死因第一位もハチ刺傷です。日本ではハチ毒アレルギーにより毎年20人前後の人が死亡しています。その多くはスズメバチかアシナガバチによるものです。初回の刺傷で死亡する可能性も十分にあり得ることで、致死のアナフィラキシーに至るには1回の刺入で十分です。

ハチによる刺傷回数と死亡の関係は多数の刺傷歴よりも一回の刺傷によることが多いとされています。ハチ刺傷で全身反応を来した患者は、2度目の刺傷で30~60%が全身反応を来します。また、短期間に繰り返し刺されるとアナフィラキシーを発症しやすくなります。ハチ刺傷の0.3~3%がアナフィラキシーに至るとされ、重症例は中高年に多く、理由は不明ですが小児の重症化は少ないとされています。

毒液そのものによる中毒は、数十~数百回分の刺傷を同時に受けた場合以外では問題となりません。ハチ毒アレルギーの遺伝性についてはまだわかっていません。

日本アレルギー学会はアナフィラキシーの定義と診断基準を示しています。ハチ刺傷の場合を例にとると、以下の3項目のいずれかに該当すればアナフィラキシーと診断します。

①皮膚症状（全身の発疹、そう痒<sup>よ痒</sup>または紅潮）、または粘膜症状（口唇・舌・口蓋垂の腫脹など）のいずれかが存在し、急速に発症する症状で、a.呼吸器症状（呼吸困難、気道狭窄など）、b.循環器症状（血圧低下、意識障害）の少なくとも一つを伴うもの。②ハチに刺されたあと、急速に（数分~数時間以内）発現する皮膚・粘膜症状、呼吸器症状、循環器症状、持続する消化器症状（腹部<sup>せんつう</sup>痙痛、嘔吐）のうち二つ以上をとる。③ハチに刺された後の急激な（数分~数時間以内）血圧低下（11歳以上では<90mmHg）。

アナフィラキシーの中で、血圧低下や意識障害を伴う場合をアナフィラキシーショックといいます。

ハチ刺傷によるアナフィラキシーは急速に進行し、ショックに移行する事があります。病院にたどり着けた患者は重症になる危険性を脱しているかもしれないとか、数時間たってから来院した患者は危険を脱しているかもしれないとされているほどです。ハチに刺された時、少しでも上記診断基準の症状を疑う時は一刻も早く病院を受診しましょう。

アナフィラキシーは昆虫ばかりでなく食物、医薬品、その他の化学物質、天然物質でも起こりえます。ハチに刺されやすい職場環境、重篤な食物アレルギーなどを有する人は病院から自己注射用のアドレナリン注射薬『エピペン』の処方、指導を受けておく必要があります。下呂市立金山病院はエピペンを処方できる病院として皆さんの御相談に応じています。